

# 踏み跡 <My Mountains>

中央アルプス	千畳敷から南駒ヶ岳へ縦走	No.127
--------	--------------	--------

中央アルプスへ三回目の試み。前回、前々回と異なり単独行なので、これまで以上に気を遣う点が多い。この山行のためにジョッキーの#611 という新型アタックザックを買った。3000 円のザックの価値を確かめる意味もある。

しかしながら、先月は 70~80 時間の残業、今月も月初ながらすでに 20 時間に達しているので若干疲労気味で体調はあまり良いとは言えない。休暇の初日はゆっくりと寝た上甥と遊んだりして静かに過ごし、二日目を出発にした。

昭和 44 年 5 月 4 日

八王子から 7 時 31 分発のこまがね 1 号に乗車。この電車だと乗り換えなしで行けるのが魅力だ。

駒ヶ根着 11 時 14 分。バスにはすんなり乗車できたが、しらび平でロープウェイの順番待ち。4 本やり過ごし 5 本目に乗車できた。

ロープウェイは約 8 分間で海拔 800m から 2500m まで上がってしまう。耳がガンとなって周りの音がよく聞き取れない。これが人間の生理にどれほど悪影響を及ぼすかは、後になってわかった。

千畳敷着 14 時、海拔 2500m。さんさんと降り注ぐ太陽の中で軽く昼食。高度順応を考えてここでゆっくり休むことにし、水を作りバターココナツを 5, 6 枚食べて小一時間の休憩。

時間的には一番雪崩が起きやすい時間帯になってしまった。今までに歩いたことがない極楽平に突きあげる急な登り。股の間に千畳敷カールの大きなお皿が広がる。そのお皿の中にたった一切れ残されたウィンナーソーセージのような山荘の赤い屋根。面白いように高度を稼ぐことができるが、息切れが激しいのに気がついた。体力低下によるものか？それとも高度順応不十分のためか？

極楽平、綾線は雪がなく岩礫と砂地。宝剣岳のどんがりも南側のここから見ると、ずっと幅広く穏やかに見える。眼下の千畳敷カールは覗きこめば吸い込まれそうな深さ。

サギダルの頭、濁沢大峰と順調に通過。桧尾岳への登りは積雪も多く、わずかに 220m の高度差だが疲労感が大きい。何となく頭の前上部が痛い。しかも本来ならば空腹になるべき頃なのに、胃に残物感があり一向に食欲が出てこない。

雪の中の桧尾岳 16 時 20 分。桧が鬱蒼と茂るところから「桧王」という古名もあるそうだ。



< 桧尾岳から宝剣岳と駒本峯 >



< 桧尾岳から空木岳 (左) 南駒ヶ岳 (中央奥) >

避難小屋に入ることを予定していたが、雪の中に埋まってしまっても見つからない。しかたがないので、桧尾尾根をマセナギ付近まで下り、樹林の中にツェルト設営。時刻は 17 時 30 分。北に宝剣、伊那前岳、千畳敷らが、南に一段と雪の多い空木、池山、木曾殿越、南駒ヶ岳らが、素晴らしい展望のテントサイトだ。

夕照の空木岳、素晴らしいとしか言いようのない赤さ、そしてわずかなガス。日が沈むとガスが消えて、今度は黒い空。天気予測では明日は前線が来るので好天は半日程度しか望めないだろう。その場合は木曾殿越まででストップとする。夕食はルーミックを使って餅入りカレー。

ロープウェイによる急性高山病だろう、頭痛、胃のもたれと食欲減退。とは言っても計画通りお餅 4 個を平らげ、19 時 30 分シュラフィン。月あかりが強くてどちらに顔を向けても暗くならない。しばらく反転を繰り返しているうちにいつしか.....。

# 踏み跡 <My Mountains>

昭和 44 年 5 月 5 日

こどもの日、起床 4 時、天気は快晴。6 時出発。約一時間登り返し桧尾岳頂上へ再登頂。そして今日はさらに南へ。西の方に薄紫色の帯状の雲がかがえるのが気になる。やはり好天はこれまでと推測できる。今日は空木岳より先へは行かない方がよかろう。明日の天候や下山時のルートのことなどを考えると、木曾殿越までとするのが得策と結論を出した。

昨日のような高山病症状はなく、体は軽く調子は上々。大滝山、熊沢岳、東川岳と気持ちの良い尾根歩きが続く。右手の谷を隔てて木曾御岳と

その右に乗鞍岳。いずれもその頂はとても初夏とは思えない白さ。前方に連なる空木から南駒へのダイナミックな岩稜は残雪の白さもあいまって、ただならぬ神々しさを示している。折から薄雲をまとった空はさらに冷たさを増して、岩稜を冷え冷えとしたものになっている。

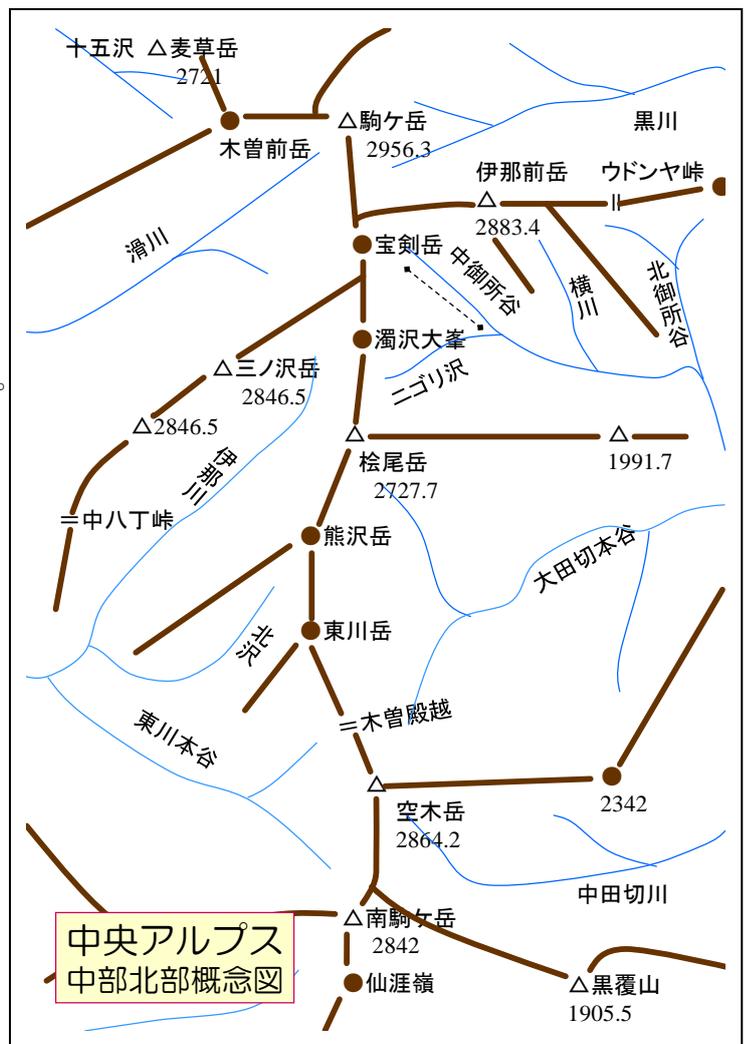
東川岳からハイマツの岩場をツツーっと下ると木曾殿越、時刻は 9 時 30 分。

治承四年 9 月 7 日朝日将軍木曾義仲が、伊那の笠原兵吾を攻めるべくこの峠を越えたという。そんな言い伝えから「木曾殿越」という名が付いたらしい。義仲にまつわる伝承を見ると、険しい山越えをわざわざ選ぶなかなかの戦略家と見える。木曾殿の話などを思いながら、小屋の横で昼食。小屋のおじさんに聞くと、空木小屋はまだ雪に埋まっていて使用できないとのこと、今日はここでストップということに決した。しかも小屋泊まりすることにした。

小屋に荷物を預けて空木岳頂上へ。約 50 分の急登で岩礫を登りつめ、砂地の現れた空木岳山頂に到達。空木岳は 2864m、数ある山の中で空木岳という山名はどことなく味わいと品のある名前である。木曾殿越という名とともに木曾山脈の山旅を楽しませてくれる山の名である。景色もここまで来ると変わってくる。左に仙涯嶺の真っ白な肌を少しだけ覗かせた南駒ケ岳の迫力に、しばし見とれざるを得ない。雪の量も一段と

多くなり、岩肌が描く様々な文様は大きさで力強さ以外の何かをも感じさせる。右の肩に遠く恵那山のゆったりとした山並みも見られる。

空木岳からさらに南へ、岩尾根を一時間ほどで南駒ケ岳。南駒は北部の木曾駒と区別するためにこういう名がついたと思われるが、由来についてはわからない。もともと、木曾駒でさえ地元（伊那谷）の人達は天竜川をはさんで向かい合う甲斐駒と区別して西駒と呼んでいるらしい。木曾駒には(今頃の時期に)馬の形の雪形が現れる。南駒には馬の雪形の話はな



## 踏 み 跡 <My Mountains>

いようだ。ともあれ南駒ヶ岳は海拔 2842m。これもやはり良い山だ。

ここで特筆すべきことは、宝剣岳、桧尾岳あたりからは塩見岳の左にチョコンと顔を出していた富士山が、熊沢岳、東川岳、空木岳あたりでは塩見岳の陰に隠れてしまい、見られない。さらに南下して南駒まで来ると、今度は塩見岳の右側にチョコンと顔を出すようになる。この富士見のスリルも木曾山脈の山旅の楽しみの面白さのひとつだろうと思う。

仙涯嶺、越百と連なる南部の山への稜線を眺めているうちに空は絹雲がちになり、冷たい風が吹き始めて来た。やはり天気の前測は的中した。

空木岳に戻り肌寒い頂上の岩の上で、飯田から来た髭モジャの単独行のおっさんと 30 分ほど話し込む。奥念丈、安平路方面の知識が豊富な人だ。この辺の山は随分歩いているらしい。空木のカールでビバークをしたくてこの時期を狙って登って来たそうだ。いやはや脱帽！！

木曾殿越の小屋に戻ると 15 時 05 分。小屋の二階の窓から雲に隠れる寸前の空木岳をスケッチ。

食事の後は小屋のおじさんとおしゃべり。連休を過ぎて静かになった山小屋だとういう楽しい時間を持つことができる。昭和 13 年の早大卒というおじさん、話題も豊富だし時局の見方も鋭いし、なかなか味のある話を聞かせて下さる人だ。

風はさらに強くなり、気温もかなり低下してきた。春山の天候の変わり目に見られる現象、こんな時に遭難事件が起きやすい。決断に狂いがなかったことを喜ばなければならない。

昭和 44 年 5 月 6 日

起床 7 時、風雨が強く外には出られない。許されるタイムリミットを 10 時と設定し、それまでは焦ることなく天気を見ながらゴロ寝と決め込む。9 時、雨は止んだがまだかなりの風。10 時、雨は止みいくらか風が弱くなったがガスに覆われている。

10 時 10 分、意を決して出発。小屋で一緒に時間をつぶした名工大の学生と一緒に。

東川岳トラバースから 2371m 独標までは雨で十分に水分を含んだ重い雪と、雪の下のハイマツとで歩きにくいことこの上なし。うっかりしていると腰まで潜ることさえある。どこの山へ行った時だったか、「変なことを考えながら歩いていると雪に潜るぞ」と言われたことを思い出す。全神経を足と腰とに集中させて、「鞍上に人なし、鞍下に馬なし」という乗馬の心得での歩きが続く。

独標を過ぎて歩きにくさから解放されると今度は日も照りだして、暑さとの戦い。独標から 850m の下り、稜線から数えれば 1100m の下りで北沢の流れに出た。

豪雨の影響で北沢の流れは海拔 1500m の谷間の流れとも思えぬ水量と化しており、靴を脱いで首に掛けて裸足で渡渉する場面もあった。途中仙人の泉と呼ばれる水場で潤したばかりの喉にさらに北沢の水をたっぷり入れて元気増強の薬とし、対岸の尾根に取りつく。

正午を過ぎて一段と暑さが加わった、しかも風のない谷。熊沢岳からの長い稜線の突端をからむようにして登り、300m ほど下り伊那川のほとりの伊那川小屋に到着。15 分ほど左岸を遡り河原で 15 分の小休止。

ここからは中八丁の登り、そしてその後は待ちに待った下り。チョコレートを食べた中八丁の登りに備える。右岸に徒渉して極楽平から南西に伸びる長い尾根（浩平ルート）を 25 分の登りで中八丁峠。きれいに晴れあがった夏を思わせるような空と積乱雲のような雲。西に木曾谷をはさんで木曾御岳の雄大で独特な面構え。東南東には空木岳の一部分とその左に南駒、越百。手前の稜線の緑の笹とその向こうの雪をたっぷりつけた岩稜の荒々しさとその組み合わせが素晴らしい。遥か下の方に木曾川の流れと中央西線の倉本駅の小さな駅舎が見える。峠で最後のシャッターを切り、ゆうゆうと 25 分の休憩。

小尾根をなだらかに下り、倉本駅が高度差あと 50m ほどに迫ったところで D51 が牽く塩尻行が入ってきた。

ドキッとしながらも下り続けると列車は意外にも長い停車時間。よし、間に合わせてみよう！！

小走りに駆け下りてみたが・・・、駅舎の反対側の田圃の上まで来たところで黒い煙を吐いてゆっくりと立ち去ってしまった。

再び静まり返った倉本駅に到着。駅前には中山道が通っているだけで何もない。次の列車までは一時間半もあるので、



## 踏 み 跡 <My Mountains>

顔を洗った後国道沿いのドライブインまで行き食事。

食事の後プラットホームに入って通過していく D51 を撮影していたら、駅長さんが「お茶を飲みに行っちゃい」と声を掛けてくれた。駅舎の中でタクアンとお茶とおしゃべり。駅長さんは山梨の人で、三人の子どもが国立に住んでいるという。木曾路の話、国立にいる子どもたちの話、倉本の話・・・心地よいおしゃべりの時間が過ぎていくひととき。

16時41分発塩尻行、駅の職員の人達が皆で手を振ってくれてうれしくなるような発車シーン。

上松で急行きそに乗り換え、窓から寝覚ノ床の清流を眺め塩尻に18時に到着。

28分の待ち合わせでアルプス10号に乗り、辛うじて今日のうちに家に帰ることができた。

かくして、ジョッキー#611のアタックザックによる第一回目の山行は、急性高山病に始まり大雨などにも会いながら無事終了となった。

以上